

エーリッヒ・フロムの社会的性格論とその人間学的含意

——フロイト批判とデューイの習慣の社会心理学に着目して——

東京大学大学院 魚住知広

1.目的

エーリッヒ・フロムの社会的性格論は『自由からの逃走』等の著作の方法論的な基盤となっている他、リースマンやミルズといった大衆社会論者達にも影響を与えたとされる。しかし、なぜ彼がそれを方法論的な立場として提起せねばならなかったのか、またその方法論を提起したことの学説史的な意義は何かといったことについては必ずしも明らかではないように思われる。本報告の目的は、エーリッヒ・フロムの社会的性格論について学説史的に検討することで、それがいかなる理論状況から提起され、どのような方法論的独自性をもつのか考察することである。

2.方法

フロムが自身の方法論として社会的性格論を打ち出している Fromm(1941=1951)の付論やその草稿である Fromm(2010)等を素材として扱う。それらにおいてなされているフロイトへの批判や、草稿で自身の立場に近いものとして言及されている Dewey(1922=1995)習慣の社会心理学への評価に着目する。

3.結果

社会的性格論はフロイトの人間学の批判的継承から成立しており、フロイト的人間観はその時代制約性や機械論的な人間観という点から批判される。機械論的人間観への批判はフロムのホップズへの批判とも重なるものであり、フロイトやホップズへの批判は後のスピノザ思想の受容へと繋がることとなる。社会的性格論では性格の歴史性が強調されるが、これに近いものとしてデューイの習慣への着目が高く評価されている。しかし、フロムはデューイが人間本性をあまりに可塑的なものとして想定していることを批判し、人間本性に一定のモデルがあることを強調した。

4.結論

フロムの社会的性格論はフロイト的人間観を批判し、社会的存在としての人間の歴史性に着目するものである。デューイの社会心理学と同様に生活形式や習慣の影響を認めるが、無限に可塑的なものとしてではなく一定の傾向性をもつものとして人間本性を捉えることにフロムの立場の独自性がある。すなわち、社会的性格論にはその方法論的な前提として人間本性のモデルが想定されており、フロムがそれ以後独自の人間学を展開していく上での出発点になったものと考えられる。

文献

Dewey, John, 1922, *Human Nature and Conduct*, New York: Henry Holt And Company. (=1995, 河村望訳『人間性と行為』人間の科学社.)

Fromm, Erich, 1941, *Escape from Freedom*, New York: Holt, Rinehart and Winston. (=1951, 日高六郎訳『自由からの逃走』東京創元社.)

——, 2010, *Beyond Freud: From Individual to Social Psychoanalysis*, New York :American Mental Health Foundation.